

1994 年 2 月 14 日

電気通信大学 / 通報「研究者の一筆」原稿

「研究する大学」での研究

電気通信大学大学院情報システム学研究科

情報ネットワーク学専攻 弓場敏嗣

プロローグ

通産省工業技術院電子技術総合研究所から昨年 4 月、本大学に赴任して 1 年が過ぎようとしている。着任前に予想していた大学の有り様と現実との違いは、総じて小さいものではあった。同じ官庁でも、通産省の研究機関と大学では、異なる事務処理の文化を保持しているようである。例えば、大学では、東京都区内など隣接地域への交通費の支給は、なぜか認められていない。また、国際会議など学会参加費の校費による支払いは、学生はもちろん教官に対しても認められない。企業、国立研究機関、他大学など学外との交流を密にすることが、これからの大学にとっては欠くべからざることと思う。しかし、現状はそれを阻む方向に働いている。普通とは逆の意味の公私混同が行われている訳だが、それらは些末なことだと言う人も多い。しかし、大学人の品格についてうんぬんされる昨今の風潮の一因となっているように私には思える。

大学研究の応援歌

私は本学大学院情報システム研究科に所属し、コンピュータの並列処理に関する研究と教育を行う役割を担っている。大学の現状を 10 ヶ月という短期間ながら経験し、研究と教育およびそれらに付随する雑務について多くのことを考えさせられた。以下では、「研究者の一筆」ということで、大学に期待される研究のあり方について感じたことを綴りたい。大学において行うべき研究の取り組み方について、問題点の指摘と類型化した範疇ごとの研究のすすめを述べることで大学研究の応援歌としたい。

ば) 爆発指向基礎研究

本来、大学での研究の存在意義は、期限付の成果を期待されないことにある（と思っていた）。基礎研究ばやりとはいえ企業での研究は景気動向の影響を受けるのは常識だし、国立研究機関においても、いわゆるプロジェクト研究が幅をきかせている。その点、大学では息の長い本格的な基礎研究の展開が可能な環境にはある。しかしながら、当節、文部省や企業からわずかなりとも研究費を獲得するためには、期限付で成果の期待できる提案を行わざるを得ない状況にある。結果として、研究課題の設定に賭博的要素を含んだ爆発指向性が失われてしまっている。できるかどうか分からないができればすごいし、他でや

っていないのでやってみる価値はありそうだという程度の判断で、課題への挑戦を積極的かつ意図的に行うべきと考える。

び) 美学ベース貧乏研究

もともと十分な研究費など望むべくもないと開き直れば、大学では研究者の美学に基づいた研究課題への挑戦が可能である。大成する研究者は研究の進め方に美学を感じさせるものをもっている。研究費よりも自己の美学に殉じる心意気が望まれる。また、そうした美学をもつような研究者を育てる教育指導も大切ではなかろうかと思う。身边には理論指向の講座もいくつか配置され、時代に流されない求道的な研究姿勢と雰囲気を感じられるのは好ましい。

ぶ) 文化的のんびり研究

総じて工学系の研究者は余裕がなく、いつもあくせくしている印象がある。先端科学技術領域の研究を生業としていると、分野の急速な発展が研究のスタイルをおのずと決めてしまう傾向があるようである。自分で好んであくせくしている場合もあるが、多くはあくせくさせられている場合が多いように思われる。農業や林業分野での研究の進め方や歴史学、人類学などにおける研究の方法論に見られるように、のんびりとした気宇壮大な気分で取り組むことができる研究課題の設定も必要ではなかろうか。ただし、農業分野などにおいて、本当にのんびりした気分で研究が行われているかどうかは未確認である。

べ) 勉学指向便宜的な研究

大学院では学生に修士論文、博士論文を書かせる必要がある。学生が行う研究については、そうした論文のための研究というのは本末転倒であるとはいえない。むしろ、2年なり3年なりの期限内に論文としてまとまるように課題を設定し論文を仕上げることは、教育的見地からも有効な配慮である。その結果として、学生に対しては短期間である程度の成果が予想される研究課題を設定することになる。次世代の研究者を養成することの他に、社会に出て役に立つ高度な知識と経験を習得させることが大学院教育の役割である。そのように考えれば、文献調査や実地調査に基づいて知識を幅広く獲得し整理することを主目的とする勉学指向の調査研究を課題とすることも肯定されよう。

ぼ) 僕等的暴走研究

研究はしょせん「おたく」的営為である。研究を行う個人の価値基準にしたがって、自発的に面白いと感じたことをつきつめて追究する。「おたく」的に研究対象に肉薄する過程で、当初設定した課題とはまったく別の方向に暴走することが奨励されてよい。暴走は課題への取り組みの強さの結果であり、適当な課題を適当に処理するといった態度からは生じない。

つまみ食いのにあちこちと研究課題を渡り歩く中からは、暴走的エネルギーは期待できない。学生諸君には、自分の研究課題を自分で発見し、僕等的暴走を感じさせる研究姿勢を望みたい。

エピローグ

世紀末においては、多様な価値観が輩出されると言われる。新しい 21 世紀に向けての種々の社会的変革の試みが行われる中で、大学における研究と教育の有り様も例外たりえない。社会的存在理由という巨視的な観点からすれば、大学の存在意義は増しこそすれ減ることはない。しかし、微視的な個別論の話となると、大学の差別化あるいは階層化が世の中の趨勢である。長期的視点に立った電気通信大学の独自性の確認と外に向けた主張が必要とされている。変革の時期は下降と上昇の機会がともに存在する。20 世紀末の変革のご時勢を本学の上昇の機会ととらえ、そのための方策を様々な観点から点検することが求められているように思う。

囲み記事：情報システム研究科の紹介

昨今の情報化の波は著しい。ここ 10 年の内に日本語ワードプロセッサ、ファミリコンピュータ、電子手帳などは社会の末端にまで浸透している。これらの個別のコンピュータ機能が、これからの 10 年でネットワークで統合化されようとしている。大学は社会の変化に教育と研究の面で応えていく役割りをにない、時代にふさわしい人材を育て新しい技術を生み出すことが求められている。本学大学院情報システム研究科は、そうした使命をおって 1992 年 4 月に設置された。

現在、情報システム設計学および情報ネットワーク学の 2 専攻から構成されている。1994 年度からは、あらたに情報システム運用学専攻が新設される予定となっている。各専攻は、5 つの基幹講座と 2 つの協力講座（電気通信学部の教官が主宰）からなる。うち 4 つの基幹講座には、郵政省通信総合研究所、日本電信電話（株）、国際電信電話（株）、（財）鉄道総合技術研究所、日本放送協会などから客員教官を迎え、大学院における教育と研究に幅と深みを増している。なお、各専攻の学年あたりの学生定員は、博士前期課程 37 名、博士後期課程 12 名である。本学電気通信研究科とも協調しながら、今後の大学教育の鍵を握られる新しい大学院のあり方を模索している。皆様のご支援をお願いしたい。